

「すべての存在は、変わりゆくものである。怠^{おこた}ることなく、心をこめて生きなさい」

これは、お釈迦さまがお亡くなりになる直前に遺^{のこ}した教えです。

お釈迦さまは御年八十。ところは北インドの町クシナガラ^{こうがい}の郊外に立つ、サラの樹^きの下^{もと}です。お釈迦さまは、身を横たえておられました。

お釈迦さまがお亡くなりになる、半^{はん}日^{にち}ほど前のこと。

スバツダという、修^{しゆぎ}行^{ぎやう}者^{しや}がクシナガラ^{こうがい}の町に住んでいました。スバツダは、お釈迦さまが、今夜にも亡くなるだろうという話を聞きました。

「わたしは、これまで様々な先生に出会い、多くの教えに接してきた。聞けば、お釈迦さまが今夜亡くなるという。かの人の教えをぜひ聞きたい」

スバツダは、早速、お釈迦さまのもとへ、出向きました。

応対したのは、弟子のアーナンダでした。お釈迦さまの状態は悪く、アーナンダは、当然スバツダの面会を断りました。

しかし、スバツダはあきらめません。都合三回、面会の希望を伝えました。アーナンダは「スバツダさん、先生を悩ませてはいけません」といづれの願いも断りました。

その時、お釈迦さまの声がしました。

「アーナンダよ。スバツダを拒んではいけない。スバツダは、私を悩ませようとしているのではないだろう。教えを知ろうとしているのだ」

お釈迦さまは、いつもと同じように、懇^{こん}切^{せつ}丁寧^{ていねい}に、明快に教えを説きました。この時お釈迦さまは、「八^{はつ}正^{しょう}道^{どう}」すなわち八つの正しい生き方について説かれたといわれています。

スバツダは、お釈迦さまの教えに感^{かん}銘^{めい}を受け、弟子になりたい思いを述べました。お釈迦さまはこれを許し、スバツダはお釈迦さま最後の弟子となったのです。

これが、お釈迦さまが亡くなるわずか半日^{はんにち}前のことなのです。言葉を発することのみならず、体を動かすこともままならない状態であったでしょう。しかし、お釈迦さまはスバツダに教えを説き、弟子になることを許したのです。

二十九歳^{しゆっけ}で出家をし、三十五歳^{さんご}で悟りを開かれ、それを人々に伝えることを決心してから^{しやう}の四十五年間、お釈迦さまは教えを説き続けてきました。ご自分が、たとえ苦しい状態であっても、それは変わることがありませんでした。なぜなら、すべての存在は変わりゆくものであり、人生は、怠^{おこた}ることなく、心をこめて生きるべきものであ

るからです。

最後の言葉を発する直前にも、お釈迦さまは居並いならぶ弟子たちに、「私の教えで分からないことはないのか？」と三度、問いました。

お釈迦さまは、自分が人々に伝えた教えの通りの人生を、生ききったのです。クシナガラクシナガラの郊外、サラの樹のもと。お釈迦さまの死は、とても静かなものでありました。